

# I C U 在学経験の評価

## — 1986年度追跡研究—

原 一雄・大井 直子  
川戸さえ子・鈴木 義也

### I 目 的

この調査は、国際基督教大学教養学部ならびに大学院の卒業生に対して質問紙による意識調査を施行し、嘗て在学中に経験した諸々の教育プログラムならびに学園生活の諸側面につき現在彼らがどのような評価を下し、また、母校の今後の教育方針については如何なる意見ないし期待を抱いているかを明らかにすることを目的とする。

1953年の大学要覧第1巻の冒頭には、本学の努力すべき4大目標の一つとして、「教育を振興し、自己批判と評価によってその発展に寄与すること」と記されていた。従って、われわれは創立当初の理念を大切に堅持しつつ、それと同時に、絶えず流動的に変化して止まない現代社会の中で、現在ならびに未来の教育活動が如何なる意義と可能性を孕んでいるかということ常を常に自己点検し、その評価の結果を日常の教育活動の中に積極的にフィードバックしていく道を思索すべきであると考えた。

さて、上記のことを実践するに当たってわれわれが特に留意したい点は、評価する主体は飽くまでも自分自身でなくてはならぬこと、またそれと同時

注： 本調査にご協力下された同窓会の諸兄姉、本学の教職員、理事および評議員、ならびに非常勤講師の方々と学部学生の諸君に、また、資料の整理に当たってご協力いただいた総合学習センターの富田重成氏ならびに教養学部学生の中里恵子、片岡千賀子、戸塚陽子諸嬢に厚く感謝の意を表します。

に、決して単なる独り善がりであってはならぬということであろう。そこで、このキャンパス生活を共有する大学の構成員たち、すなわち、学生、教職員、行政担当者、理事と評議員、そして卒業生たちの全てが、それぞれ自己を顧みると同時に、お互いを冷静且つ率直に評価しつつ、その良い成果については共に喜び、また、不満足な点についてはその原因を探って反省し合うのが、大学という共同体に連なるわれわれが求める最も望ましき評価活動の姿と考える。

また、このような学内の相互評価がなされてこそ、はじめて学識経験者、大学基準協会や専門学会等の学外から寄せられる批判や助言を、われわれの実践活動に活用することが可能と思われる。この一連の評価活動という営みこそ、大学という教育機関とそこに連なるわれわれ大学人が社会に対して負う責務ないしはアカウンタビリティーの表れであり、また、自由人としての喜びと信ずるものである。そこで今回は卒業生に焦点を当てつつ、全学の諸グループも合せて調査の対象とした。

## II 方 法

### 1. 被調査者

同窓会事務局で住所の判明している国内在住の同窓生全員を調査対象とし、それに加えて本学の教員、職員、理事および評議員、ならびに非常勤講師それぞれのグループ全員と教育学科基礎科目「測定と評価」の受講生にも調査の協力を依頼した。

### 2. 質問紙

1974年度に施行した第1回目の卒業生追跡調査の質問紙（トロイヤー，M. E.，原一雄，原喜美，田中清彦，1976）に若干の修正を加えて、5つの部に分れた総計99項目からなる質問紙を作成した。（付録参照）

この質問紙の第I部は、被調査者の個人的背景に関するものである。その内訳は、性別、住所、国籍、卒業期別（CLA・GS）、専攻分野（CLA・

GS), 最終学位, 教員免許, 在学中の住居, 課外活動, 家族 (結婚・子供), 宗教, 職業 (就職経験・現在の職種・企業機関の種類・企業主), 地域活動といった12の分野であり, 数個の選択肢を備える合計25の項目が用意された。

第Ⅱ部では, ICUにおいて経験した各種の教育プログラムや諸行事, 合計25の項目について, それらが卒業後の現在, 自分の仕事と家庭生活にとってどの程度まで「役に立っている」と感じられるのかを尋ねた。また, 第Ⅲ部では同じ25項目について, それらが役立つものであるか否かに拘らず, 本学の教育活動としてどの程度「重要である」と考えられるのかを質問した。すなわち, これらの教育プログラムや行事が, 「最高に役立っている」から「少しも役立たず無駄であった」まで, また「絶対に不可欠である」から「今後は必要でない」まで, それぞれ5段階評定尺度の上で評価させるものである。

これら25項目のリストの初めの方には, 「一般教育」, 「専門教育」, 「語学教育」, 「保健体育」といった所謂教科プログラムが並んでおり, 次に「新入生オリエンテーション」, 「アドバイザー・システム」, 「カウンセリング・センター」, 「クリニック」, 「図書館」等の全学的な教育指導プログラムが続き, 更に個人によってそれぞれ参加の度合いが多少は異なる「進路 (進学・就職) 指導」, 「経済援助」, 「宗教プログラム」, 「国際的交流: 教授, 学生」, 「学科・研究室夏期行事」, 「自主ゼミ」等の項目の後に, 個人の選択に任せられた「課外活動: 文科系, 体育系, 自治活動, 広報活動」, 「寮生活」, 「アルバイト: 学内, 学外」, 「ボランティア活動: 学内, 学外」という項目が挙げられている。

第Ⅳ部はICUの大学設置要項に関する質問であり, 本学が設立の認可を受ける際に掲げた「目的と使命」の12箇条について, それらの「達成度」を「大層成功した」から「大層失敗した」までの5段階尺度で, また, 今後も本学の基本的な教育方針として「意義」を認めるか否かを「堅持したい」から「捨ててもよい」までの5段階尺度で評価させた。

質問紙には大学設置要項の原文 (付録参照) をそのまま掲載したが, 12箇条からキャッチフレーズを抜き出せば, 「1. 学問の自由と総合研究」, 「2. 独

立的思索能力と科学的批判力」,「3. 教育に精進, 批判と評価」,「4. 民主社会の原動力」,「5. 基督教徒教授団」,「6. 学生選抜の基準」,「7. 日英両語と国際的学園生活」,「8. 全寮主義と民主的共同生活」,「9. コミュニティ・チャーチを中心とした宗教生活」,「10. 健康教育と衣食住の合理化」,「11. 補導制度・個人的ガイダンス」,「12. 労働と奉仕の体験」と要約することができる。

最後の第V部は、「ICU教育の長所と短所」および「卒業生としてICUに望むこと」の二つの質問に対して、それぞれ便箋1枚以内に無記名で、率直に意見と感想を記述するように求めた。

### 3. 調査実施手続き

1986年6月、上記質問紙に調査の依頼状、回答用カードならびに返信用封筒を添えて、卒業生に対しては同窓会の御厚意により同窓会新聞に同封して発送、他の大学関係者には郵送または学内メールボックスを通して配布した。また、在学生の標本として、1987年度春学期の授業科目「測定と評価」を受講中の学生にも、同様に回答を依頼した。

回収された回答用カード（質問第I—IV部）は、本学総合学習センターのマーク・カード読み込み装置を通してコンピューターに入力させ、分類ならびに統計処理を施した。

質問紙第V部の記述式回答は、先ず内容を精読した上、その中から幾つかの要点を抽出し、質問の「ICU教育の長所と短所」に関しては大学の自己点検のために設けた15の評価領域に分け、また、「卒業生としてこれからのICUに望むこと」については本学の設置要項に掲げた12の項目に添って分類整理した。

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 回答者

本研究の対象とした6つの被調査群から得られた回答数および回答率は表

1に示す通りである。また、836名の卒業生について彼らの個人的資料を詳しく分析した結果、それらの内訳として表2（aからuまで）が得られた。

表1 被調査者数および回答率

被調査者群	質問紙配布数	回答数	回答率(%)
卒業生	6,023	836	13.9
教授会メンバー	106	22	20.8
非常勤講師	108	25	23.1
常勤職員	166	21	12.7
理事・評議員	67	12	17.9
在学生	154	111	72.1

表2 卒業生回答者の内訳

		N	(%)
a. 性別	男	354	(42.3)
	女	471	(56.3)
	無回答	11	(1.3)
b. 現住所：国内	北海道	12	(1.4)
	東北	15	(1.8)
	関東	648	(77.5)
	中部	58	(6.9)
	近畿	50	(6.0)
	中国	23	(2.8)
	四国	5	(0.6)
	九州	16	(1.9)
	無回答	9	(1.1)
c. 現住所：海外	アジア	3	(0.4)
	太平洋	0	(0.0)
	北米	9	(1.1)
	欧州	5	(0.6)
	その他	4	(0.5)
	無回答	815	(97.5)
d. 現在の国籍	日本	811	(97.0)
	アジア / 太平洋	4	(0.5)
	北米	3	(0.4)
	欧州	5	(0.6)

		N	(%)
d. 現在の国籍(続き)	その他	2	( 0.2)
	無回答	11	( 1.3)
e. 卒業:(CLA)期	1— 5	96	(11.5)
	6—10	73	( 8.7)
	11—15	75	( 9.0)
	16—20	77	( 9.2)
	21—25	175	(20.9)
	26—30	237	(28.3)
	無回答	103	(12.4)
f. 卒業:(GS)期	G' 59—61	14	( 1.7)
	G' 62—66	34	( 4.1)
	G' 67—71	18	( 2.2)
	G' 72—76	34	( 4.1)
	G' 77—81	54	( 6.5)
	G' 82—86	91	(10.9)
	無回答	591	(70.5)
g. 学部の専攻	人文	148	(17.7)
	社会	240	(28.7)
	自然 / 理学	105	(12.6)
	語学	201	(24.0)
	教育	86	(10.3)
	無回答	56	( 6.7)
h. 大学院の専攻	教育	52	( 6.2)
	行政	19	( 2.3)
	比較文化	10	( 1.2)
	研究生	1	( 0.1)
	その他	2	( 0.2)
	無回答	752	(90.0)
i. 最終学位	BA	652	(78.0)
	MA	138	(16.5)
	Ph. D.	20	( 2.4)
	Litt. D.	1	( 0.1)
	その他	12	( 1.4)
	無回答	13	( 1.6)

		N	(%)
j. 教員免許	なし	545	(65.2)
	有(1)	243	(29.1)
	有(2)	25	(3.0)
	無回答	23	(2.6)
k. 教員免許種別	英語	226	(77.1)
	社会	47	(16.1)
	数学	13	(4.4)
	宗教	7	(2.4)
l. 在学中の住居	自宅	383	(45.8)
	下宿	196	(22.2)
	寮	248	(29.7)
	無回答	9	(1.1)
m. 課外活動	なし	179	(21.4)
	文化系	304	(36.4)
	体育系	212	(25.4)
	両方	123	(14.8)
	無回答	18	(2.1)
n. 家族：結婚	未婚	342	(40.9)
	既婚	475	(56.8)
	離婚	10	(1.2)
	死別	0	(0.0)
	無回答	9	(1.1)
o. 家族：子供	なし	429	(51.3)
	1-2人	282	(33.7)
	3-4人	87	(10.4)
	5人以上	2	(0.2)
	無回答	36	(4.3)
p. 宗教	なし	502	(60.0)
	仏教	80	(9.6)
	基督教	225	(26.9)
	神道	6	(0.7)
	その他	12	(1.4)
	無回答	11	(1.3)
q. 職業：就職経験	なし	83	(9.9)

		N	(%)
q. 職業：就職経験(続き)	就職中	446	(53.3)
	転職1回	186	(22.3)
	転職2回	50	(6.0)
	転職3回以上	35	(4.1)
	無回答	36	(4.3)
r. 職業：職種	専門	149	(17.8)
	管理	80	(9.6)
	事務	153	(18.3)
	自営	26	(3.1)
	主婦	127	(15.2)
	教職	156	(18.7)
	研究	34	(4.1)
	その他	93	(11.1)
	無回答	18	(2.2)
s. 職業：企業機関	貿易	46	(5.5)
	生産	143	(17.1)
	金融	54	(6.5)
	運輸	33	(3.9)
	報道出版	64	(7.7)
	官庁	35	(4.2)
	教育	173	(20.7)
	医療	15	(1.8)
	宗教	12	(1.4)
	国際機関	10	(1.2)
	無回答	251	(30.0)
t. 職業：企業主	アジア/太平洋系	293	(35.0)
	北米系	41	(4.9)
	欧州系	26	(3.1)
	その他	58	(6.9)
	多国籍	26	(3.1)
	無回答	392	(46.9)
u. 地域での活動	職能別	67	(8.0)
	政治	3	(0.3)
	宗教	82	(9.8)
	奉仕	37	(4.4)



		N	(%)
u. 地域での活動(続き)	市民運動	32	( 3.8)
	P T A等	68	( 8.1)
	家庭塾	50	( 6.0)
	パートタイマー	12	( 1.4)
	スポーツ	101	(12.1)
	趣味娯楽	137	(16.4)
	無回答	247	(29.5)

同窓生の回答者の特徴と思われるものを取り出すと次の通りである。性別では女性の方がやや多いが、この比は過去の在籍者のそれとほぼ同じと見てよい。現住所は関東地区に集中している。質問紙の送り先を国内に限ったため、国籍もまた日本が圧倒的に多い。

卒業の期別では、卒業年度を5年毎の6グループに分けたところ、学部と大学院共に最後の2グループが全体のほぼ半数を占めた。すなわち、これらの人々が先回の調査(Troyer 他, 1976)後に卒業した若い世代であることを念頭に置いて考察する必要があるだろう。

学部卒業後に大学院へ進学した人は回答者の5分の1に当る。また、現在教職に在るか否かは別として、教員免許の取得者が回答者の3分の1であることにも注目したい。共に母校に対して強い関心を持ち、質問紙に回答をする動機の一つになったと推察される。

家庭的背景として未婚者が41%、子持ちでない人が51%という数字は、回答者が比較的若い人々だということから当然の結果といえよう。宗教ではクリスチャンが高い比率を示している。

現在の職種では専門職、事務職、主婦、ならびに教職が目立ち、教職と研究職等を合せると何等かの形で教育機関に関係を持つ卒業生の多いことが分かる。次の職業：企業機関の種類でも最大の集団は教育、その次が生産部門であった。

## 2. 教育プログラムと学園行事の評価

### 2-1 卒業生回答者全員の傾向

先ず卒業生全員の回答から、ICUにおける諸々の教育プログラムならびに学園生活の諸行事、計25項目が、現在の生活にとってどれ位「役立っている」のか、また、本学の教育活動としてどの程度「重要である」のか、それぞれの項目について評定値の平均値を求め、更に「役立っている」の評定値の高い順序に並べかえて図示したのが図1である。

「役に立った」程度の先頭には「語学教育」と「図書館」がこの順で突出し、その後に「専門教育」、「国際交流」等の項目が続いている。その中で平均値においてポジティブに「役に立った」と考えられるものは25項目中10項目に過ぎず、「学外アルバイト」、「一般教育」、「寮生活」といった項目が辛うじてその中に含まれる。次に出てくる項目、すなわち、「課外活動」、「アドバイザー

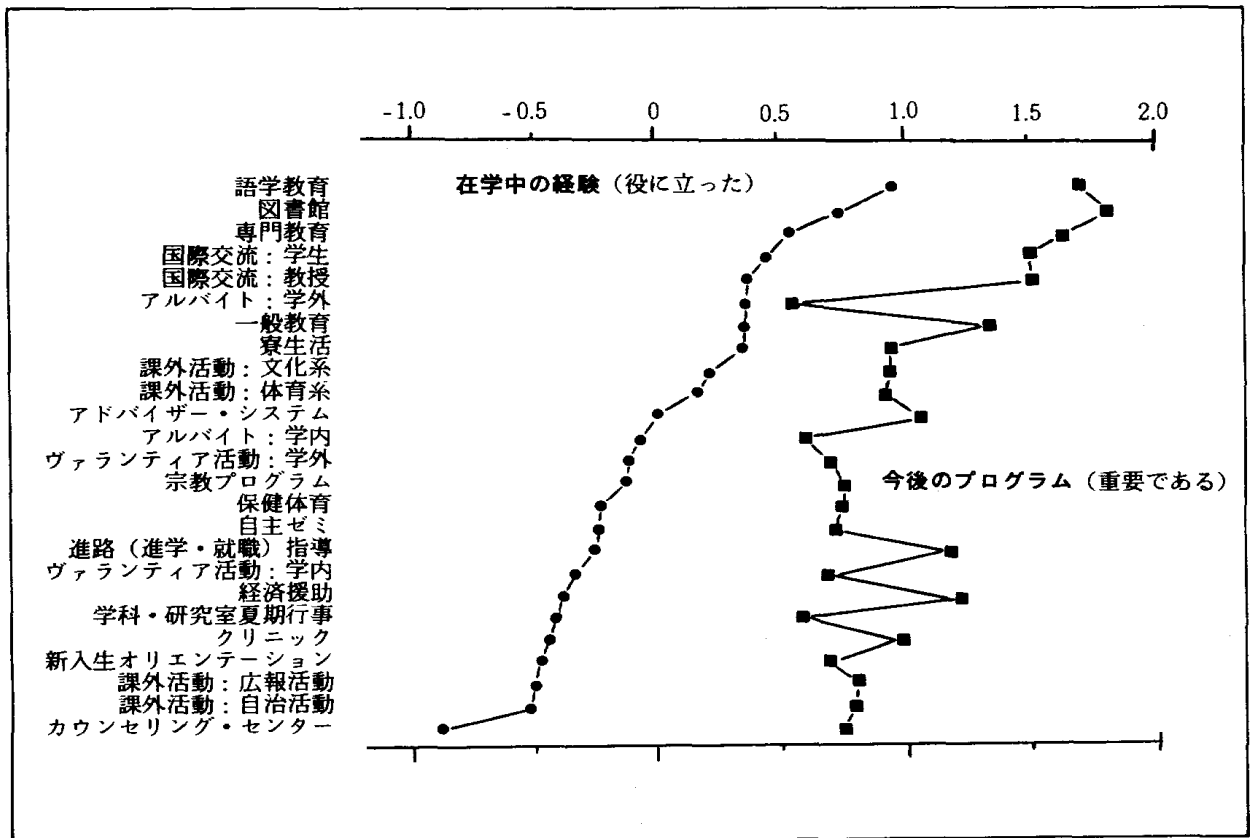


図1 教育プログラムおよび学生生活に対する卒業生回答者全員の平均評定値

(●：役に立った)

(■：重要である)

ー・システム」,「学内アルバイト」,「宗教プログラム」,「保健体育」等は、大学が積極的に力を入れてきたプログラムであるにも拘らずややネガティブな評価を受けており,「学内のヴァランティア活動」,「経済援助」,「クリニック」,「新入生オリエンテーション」等が下位に,そして「カウンセリング・センター」が最末尾に置かれていることは無視出来ない。

これら25項目が今後の母校の教育にとって如何程「重要か」という観点からは、先ず「図書館」が最上位に、次に「語学教育」,「専門教育」,「国際交流」と並び,「一般教育」,「経済援助」,「進路指導」,「アドバイザー・システム」がそれらに続いている。ここでは全ての項目がポジティブな評価を受け、且つそれぞれの項目において先の「役に立つ」か否かの評価よりも右側に大きく偏っているということは、実利の有無は問題でなく、それよりも卒業生たちが後輩たちに望む教育目標の重要性の度合いを示し、また、教職員たちに対し今後より一層の努力を期待していることを示している。

## 2-2 卒業生の期別による比較

教育プログラムおよび学園の行事に対し、卒業生の評価が在学した時代によって如何に変化するのか、彼らの期別による比較を試みた。ここでは各項目の変動を見易くするため、先ず卒業年度によって5年毎の6グループに分け、それらの「役に立った」平均値の順位を図2に、また、「重要さ」の平均値の順位を図3に示した。

図2から明らかなように、一貫して卒業生たちに最も「役に立った」と評価されているのが「語学教育」と「図書館」の二つである。この他、幾つか特徴のある変化を示した項目を選べば、次の通りである。

近年、急に順位が上昇してきた項目には、「学外のアルバイト」,「進路指導」,「体育系の課外活動」,「保健体育」等が挙げられる。「学外のアルバイト」は鰻登りに躍進し、最近卒業した人々にとっては、専門教育や国際交流のような本学の基本的プログラムと並ぶ在学中の大切な経験として受け取られている。「進路指導」の進出は偏に学生部就職相談室の努力の表れであり、後

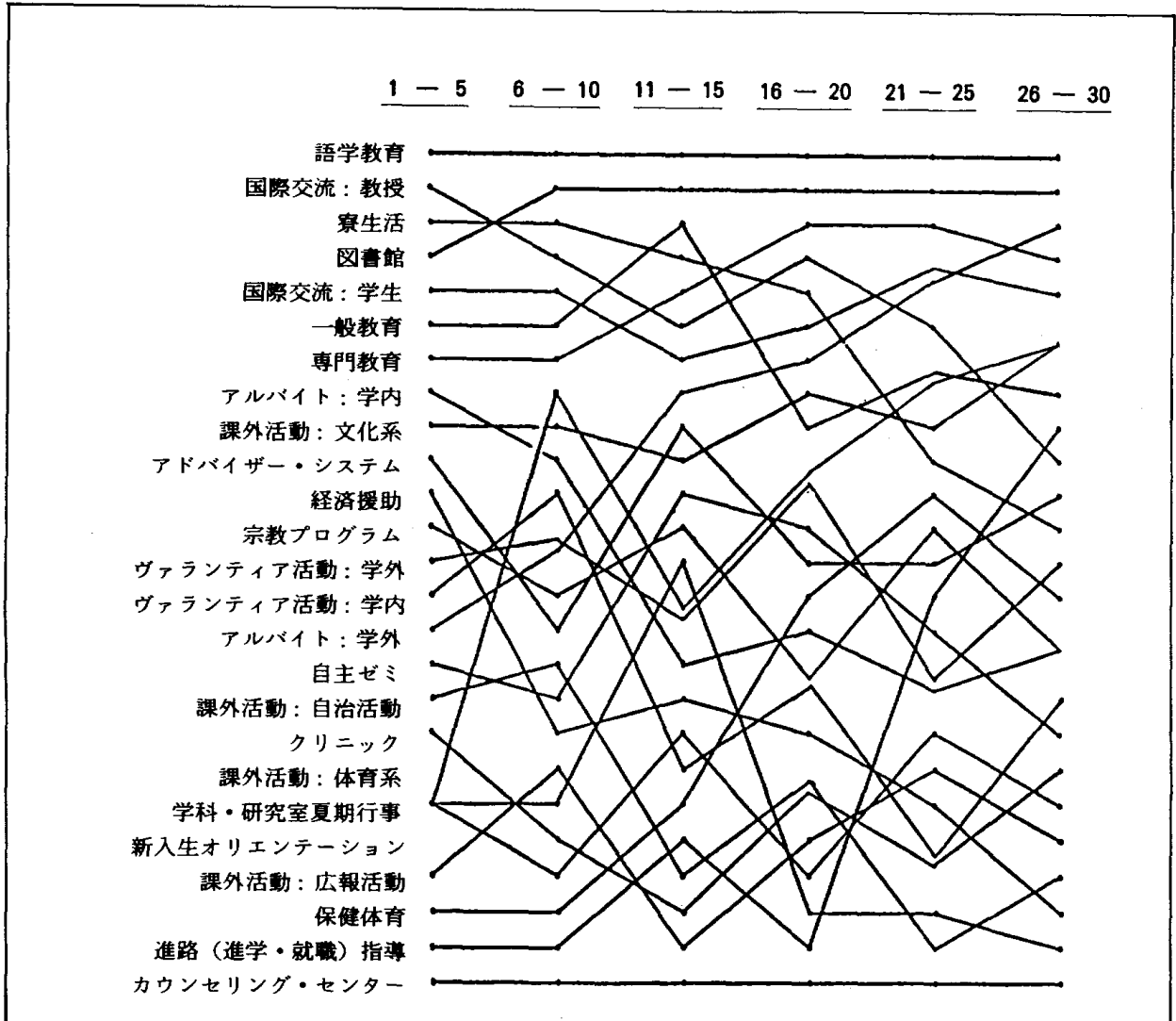


図2 教育プログラムおよび学生生活に対する平均評定値の順位による卒業生の期別比較（役に立った）

の二つは体育設備の充実によるものと考えられる。

逆に大きく下降傾向を示すものに「教授たちとの国際交流」、「寮生活」、「経済援助」等がある。これらの項目の効用が薄れた理由には、社会情勢の変化と教育活動の希釈化の両方が検討されなければなるまい。

11期から20期にかけての2つの中間グループは、所謂学園紛争とその後の混乱期を過ごした人たちで、「自主ゼミ」、「学科や研究室主催の夏期行事」等の評価は他と比べてやや高い。

図3に示した各項目の「重要性」については、「語学教育」、「図書館」、「専

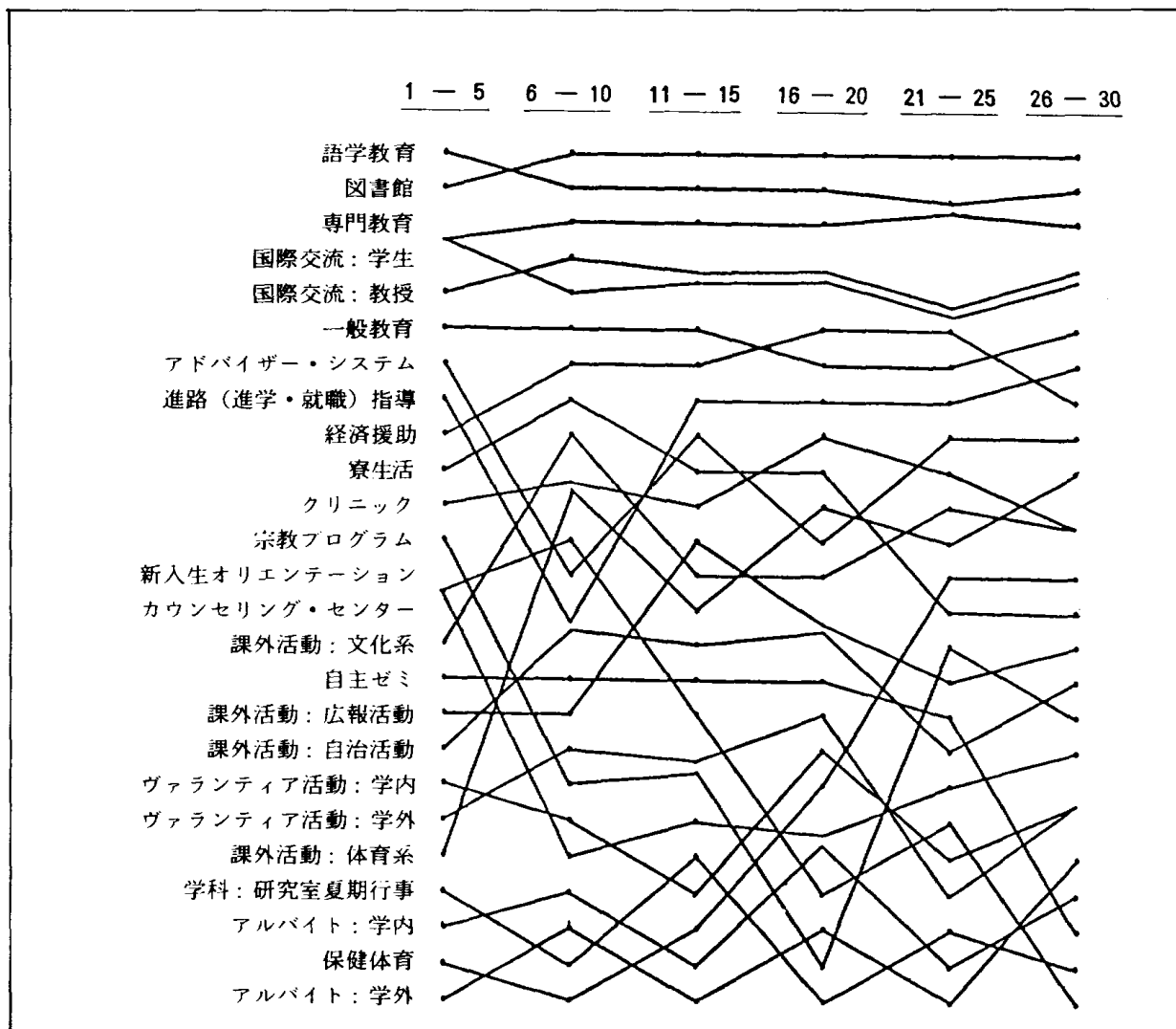


図3 教育プログラムおよび学生生活に対する平均評定値の順位による卒業生の期別比較（重要である）

門教育」,「国際交流」,「一般教育」等の上位のプログラムには期別による変化が殆ど見られない。前図と同じく,卒業生の期待が徐々に高まってきたものには「保健体育」があるが,逆に「新入生のオリエンテーション」は初期の13位から最近是最下位に落ちてきた。「宗教プログラム」と「カウンセリング・センター」は共に一時著しく下降したが,最近やや持ち直しの兆候がみられる。

### 2-3 大学構成員間の比較

今度は同窓生の結果と、他のICU関係者が同じ質問紙へ回答した結果とを比較してみる。比較するグループは卒業生回答者全員と教授会メンバー、非常勤講師、職員、理事ならびに評議員、そして学部在学生の一部である。図4は種々の教育プログラムならびに学園行事が卒業後に如何程「役に立つ」かの評価の順位を図示したものであり、また、今後も如何程「重要である」かについての順位は図5に示した。

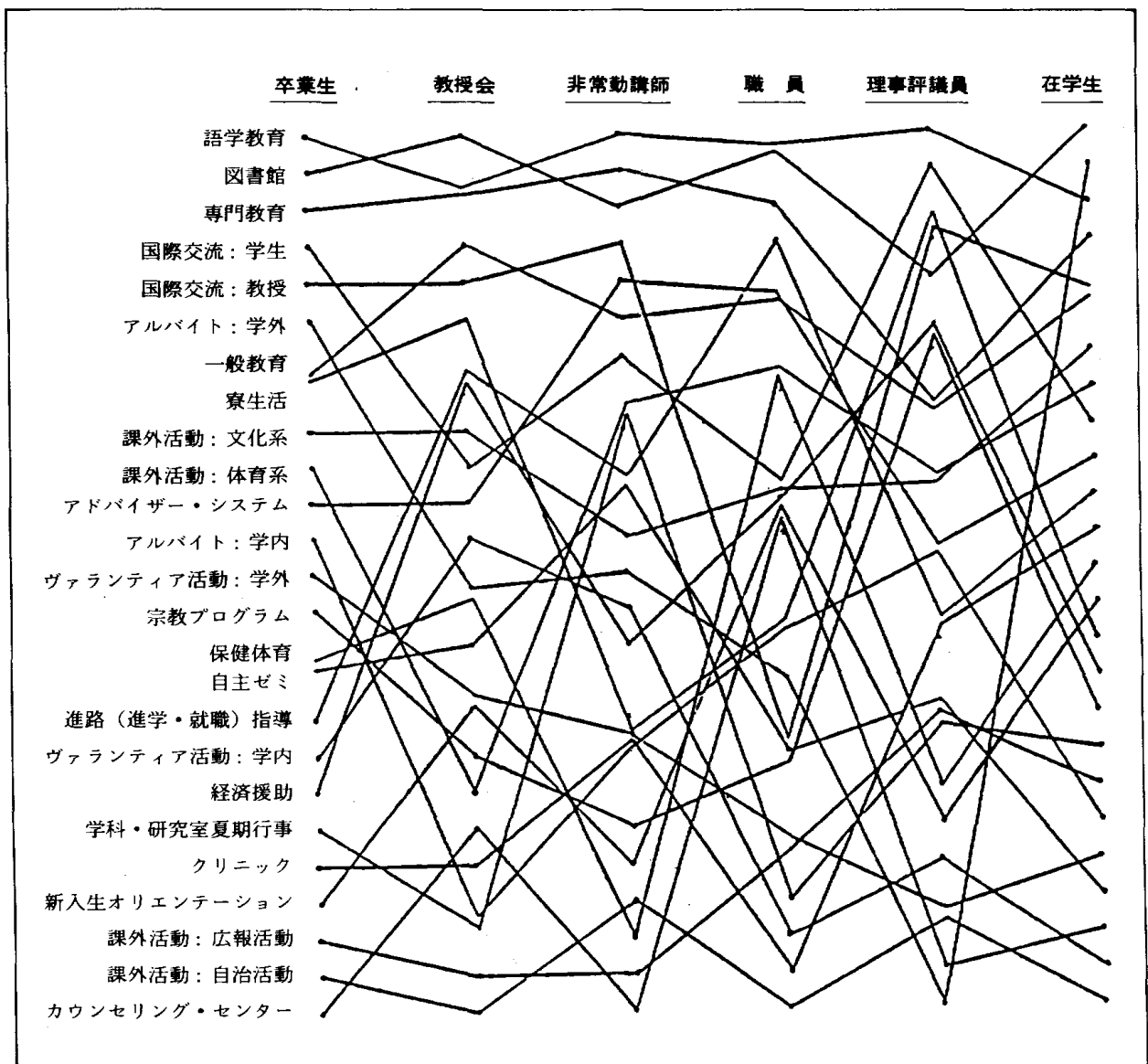


図4 教育プログラムおよび学生生活に対する平均評定値の順位による大学構成員間比較（役に立った）

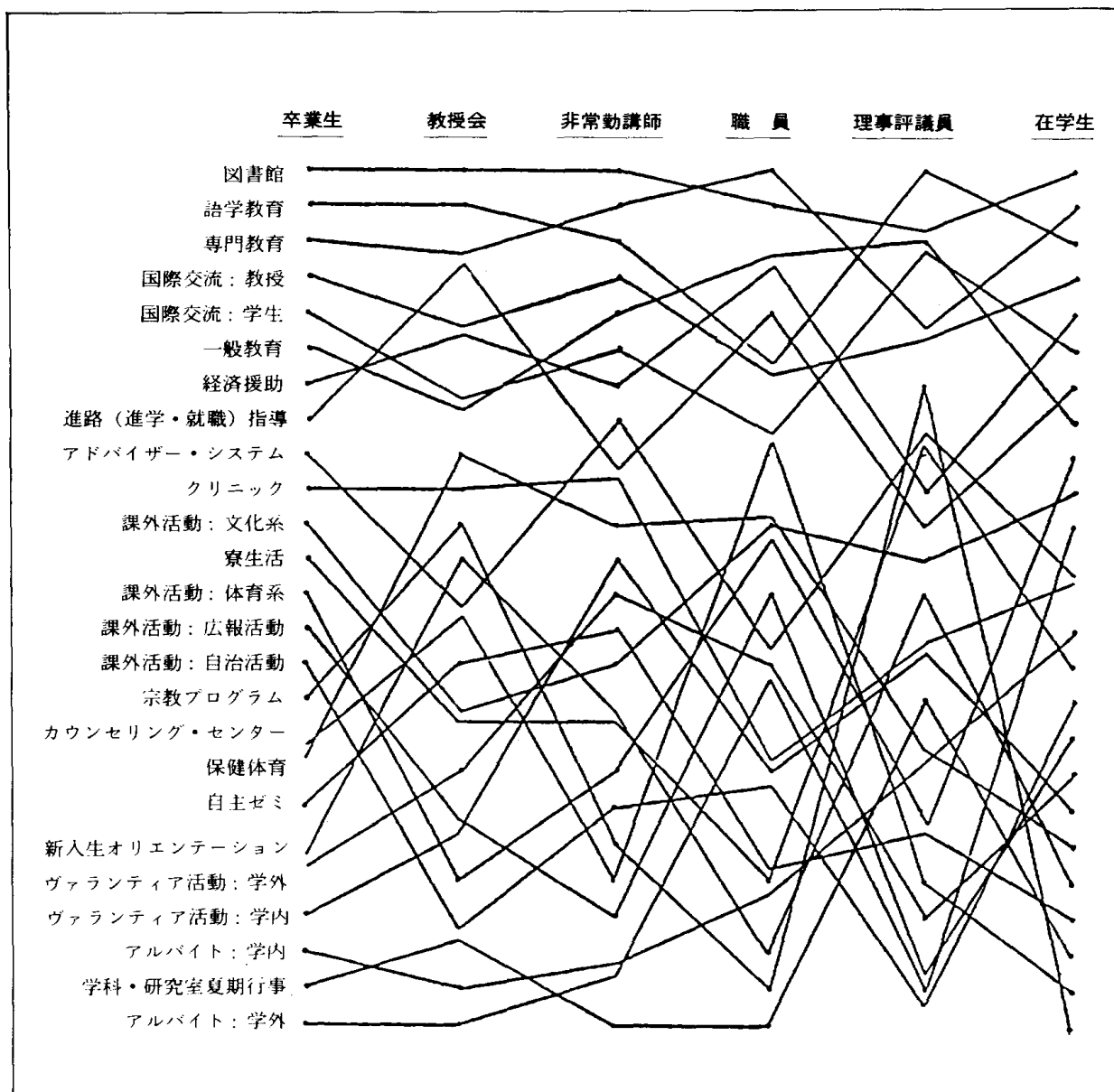


図5 教育プログラムおよび学生生活に対する平均評定値の順位による大学構成員間比較（重要である）

図4から、「語学教育」と「図書館」は何れのグループにおいても「役に立つ」点で最上位を占めており、理事・評議員を除けば「専門教育」も同様に、高く評価されている。「一般教育」の順位は少し下がるが、グループ間に大きな差異はない。次にこれらのグループ間で比較的大きな差異を示すものを取り上げてみると次の通りである。

「国際性」については、「学生同志の交流」について卒業生と理事・評議員の評価が比較的高く、「教授たちとの交流」については何故か職員だけが非常に低く評価している。「学外アルバイト」は卒業生と在学生の評価が高く、理事や評議員たちはその効用を全く認めていない。「寮生活」については非常勤講師と職員が在学生同様低く評価している。「宗教プログラム」の役割については理事と評議員のみが高く位置付けている。「進路指導」は教授会メンバーが職員の次に、また「経済援助」については理事・評議員の次に高い評価を与えている。「カウンセリング・センター」は職員のみから評価されている。なお、教授会のメンバーたちは「体育系の課外活動」や「学内アルバイト」を低く、非常勤講師は「学科・研究室主催の夏期行事」を高く評価している点が他とやや異なる。

前の図と比べ、図5にはやや高い一致度がみられる。すなわち、どのグループも「重要性」については類似の評価を与えている。差異のみられる項目は専ら下位のものであり、特筆すべきものとしては、教授会と理事・評議員が「宗教プログラム」を、また、教授会と職員が「カウンセリング・センター」を比較的高く評価している点が指摘できよう。

### 3. 大学設置要項に記載された教育目標の評価

#### 3-1 卒業生回答者全員の傾向

図6には卒業生全員によって、ICUの大学設置要項に掲げた12項目の目的と使命の「達成度」、すなわち、それらに成功したか、あるいは失敗したかの程度が、評価の高い項目の順に示されている。また、同じ図の中には、今後もこのような目標を「堅持すべきか否か」について同じく卒業生全員の平均値が、上の達成度の順に示されている。

これらの目的と使命がどこまで「達成されたか」につき、図6の中で卒業生たちが真先に主張する点は、「学生選抜の基準」が良かったということである。勿論、自分たちが入学した大学を敢て貶す理由はどこにもあるまい。しかし、それは兎も角、ICUの入試方法については非常に満足している。そ



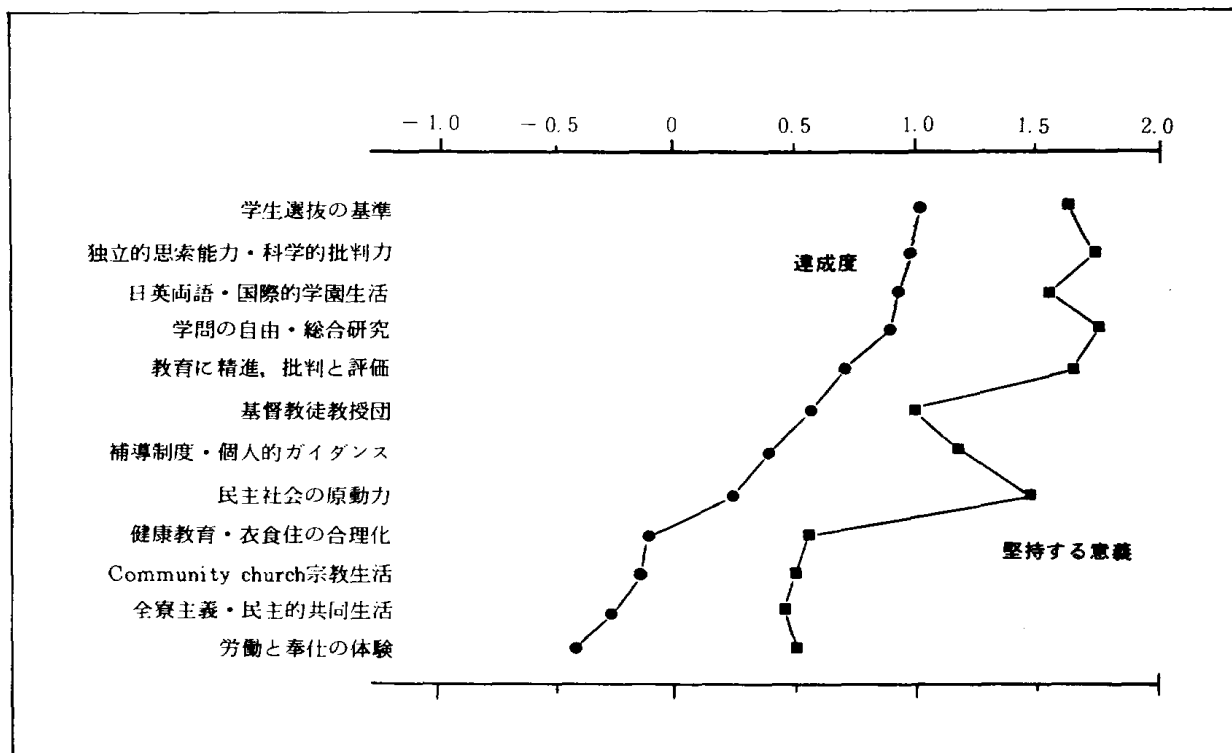


図6 大学設置要項の「目的と使命」に対する卒業生回答者全員の平均評定値 (●: 達成度 ■: 堅持する意義)

れとほぼ同じ程度に「独立的思索能力と科学的批判力」、「日英両語と国際的学園生活」、「学問の自由と総合研究」などの項目も高い評価が与えられている。

一方、低い評価を受けた項目は、最下位から順に挙げれば、「労働と奉仕の体験」、「全寮主義と民主的共同生活」、「コミュニティ・チャーチを中心とした宗教生活」、ならびに「健康教育と衣食住の合理化」であり、これら4項目の平均値はマイナスの値を示している。

次に、これらの方針を今後も「堅持すべきか否か」については、図1の中で各項目の評価値が「達成度」のそれに比べて大きく右側に寄っていることから、卒業生たちは今でもこれらの目的と使命に対して積極的な評価を下していることが伺われる。すなわち、図中の2つの点の隔たりが、その項目に対する今後の努力の必要性を示すものである。この点で最も期待の薄いものは「基督教徒教授団」の項目であった。

### 3-2 卒業生期別による比較

前節の教育プログラムや学生生活の結果と同様、各項目につけられた評価値の順位を卒業生の期別に分けて比較したのが図7と図8である。一見して明らかかなように、ここには大きな変動があまり見られない。特筆すべきものとしては、「達成度」において「民主社会の原動力」がかなり以前から、また「学生選抜の基準」が近年急に下降し始めたこと、また、「堅持する意義」については、「健康教育と衣食住の合理化」が徐々に最下位に落ちてきたこと位であろう。

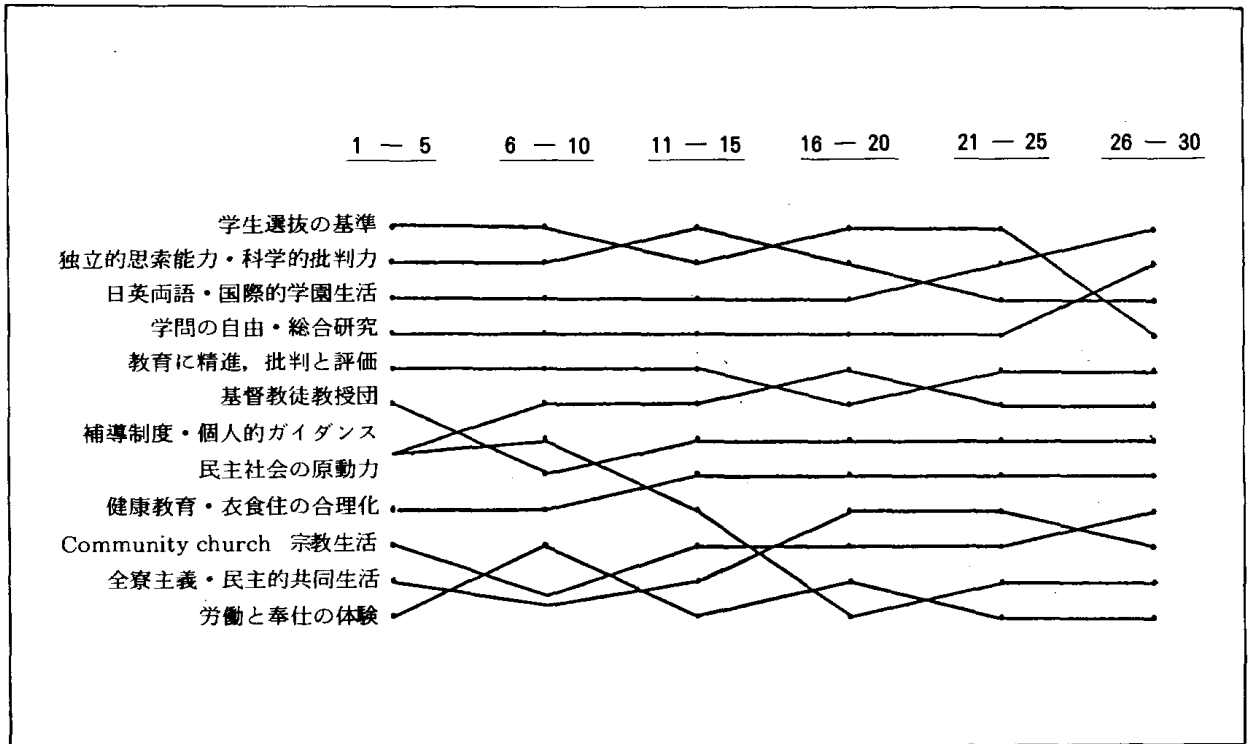


図7 大学設置要項の「目的と使命」に対する平均評定値の順位による卒業生の期別比較（役に立った）

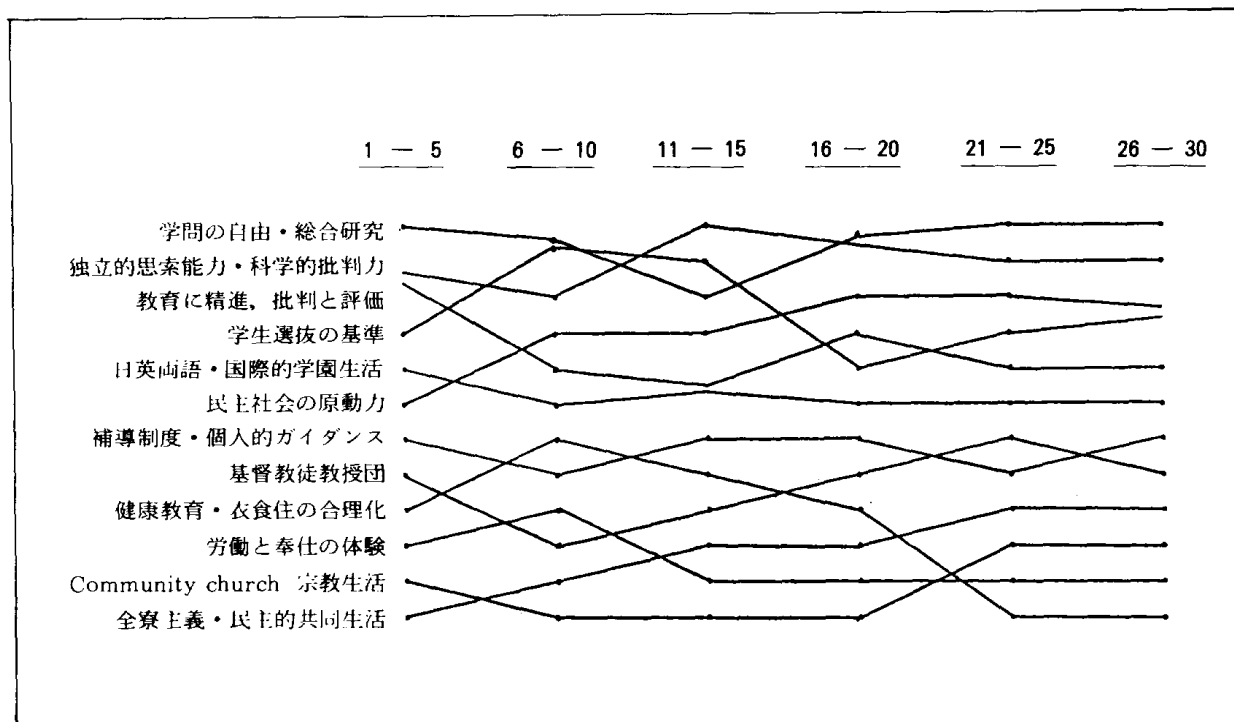


図8 大学設置要項の「目的と使命」に対する平均評定値の順位による卒業生の期別比較（重要である）

### 3-3 大学構成員による比較

大学の設置要項に対する評価と期待がいろいろな大学構成員の間でどのように異なるかを、ここでもグループ内における相対的順位を基にして検討してみると、図9と図10が得られた。そこに示されるように多少の凹凸は見られるものの、グループ間にはそれほど大きな違いは見出せない。ただ、「堅持する意義」においては、非常勤講師が「基督教徒教授団」を最下位に、職員が「民主社会の原動力」を最高位に、理事と評議員が「日英両語・国際的学園生活」を最高位に置くと共に「基督教徒教授団」と「コミュニティ・チャーチと宗教生活」を他のグループよりも高く評価している点がやや目立ち、それぞれの構成員たちの微妙な立場や期待が推測される。

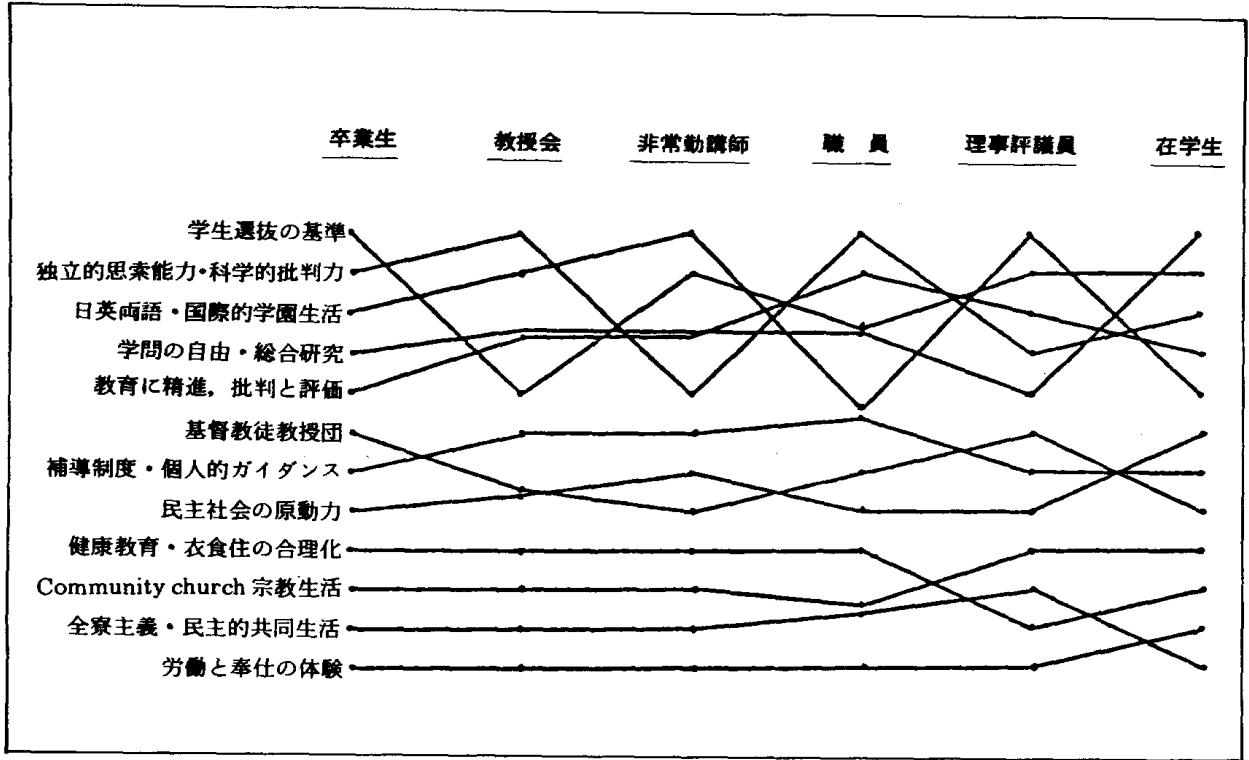


図9 大学設置要項の「目的と使命」に対する平均評定値の順位による大学構成員間比較 (役に立った)

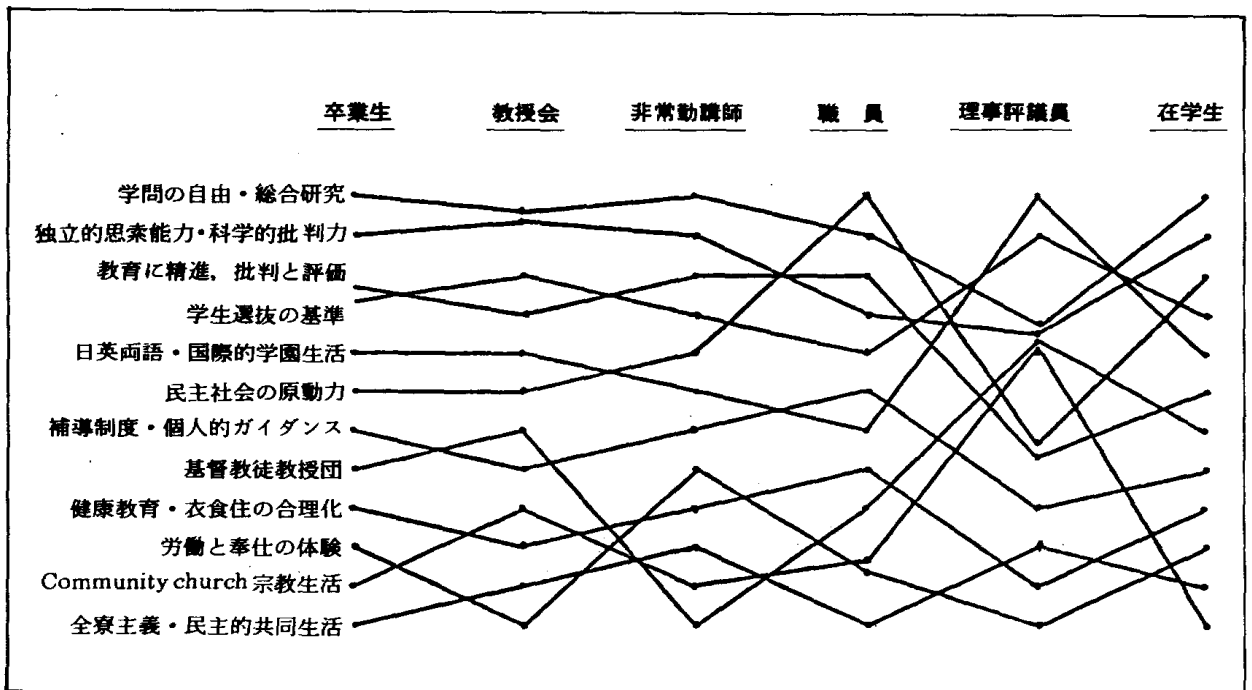


図10 大学設置要項の「目的と使命」に対する平均評定値の順位による大学構成員間比較 (重要である)

## まとめ

この調査の内の卒業生に関するものは、本来前回の追跡調査（トロイヤー他，1976）と対照して吟味されるべきものであるが，何分にも被調査者の半数が最近10年以内に卒業した若い人々であることを考慮して，直接結果そのものを比較検討することは敢て行わなかった。その代り，考察の焦点を卒業生の意識の変化と並んで，他の大学構成員たちとの比較に置き，今日，高等教育界で大きな話題となってきたところの所謂FDプログラム（Faculty Development Program）の中核を占める大学の自己点検の在り方について，一つの新たな接近法を試みたわけである。

そもそもこの調査に用いた『国際基督教大学設置要項』こそ，謂わば内外の社会に対するICUの公約であり，初代総長湯浅八郎先生が生前よく申された「明日の大学」という文言が初めて公式文書の上に記載されたものである。そこに使用されている言葉遣いは如何にも古めかしく，内容もまた，今日の恵まれた生活環境には馴染まぬものがある。しかし，今から35年前，敗戦後の疲弊した社会状況の中であって，わが国のクリスチャンたちの祈りと海外からの協力が一つとなってこの大学を産み出したことを知る上には，非常に貴重な資料と思われる。そして，それ以後もこの設置要項の変更を届け出たことがない以上，この条文は今も立派に生きているものと理解されて然るべきであろう。そこでわれわれはこの調査の結果を踏まえ，この文言の背後にある理念を今の時点でどのように解釈すべきか，また，未来の「国際的」「基督教主義」高等教育プログラムの策定を考えるに当たって，先達者たちの努力の陰に秘められたこれらの教育的試案の今日的意義をどのように問い直し，更に具体的に如何なる方法でもって，それらの理念の実現のための実践活動をなすべきかを工夫することが，今正にわれわれICU人に等しく問われている課題である。ここに本研究がその問題提起の一助になれば何よりの幸いと考える次第である。

### 参 考 文 献

- トロイヤー, M.E., 原 一雄, 原 喜美, 田中清彦 (1976) 「卒業生による I C U 在学経験の評価 —— 国際基督教大学創立25周年記念卒業生追跡調査報告 (要約) —— 」 国際基督教大学学報 1 - A 教育研究 19, 1 - 50.

## 付録：1986年度卒業生追跡調査質問紙

<b>卒業生による在学経験の評価</b> Alumni Evaluation of Their ICU Experience
-------------------------------------------------------------------

先ずこの用紙の回答欄 a. b. c. d. e. のいずれかに○印を付けた後、別紙カード (ANSWER CARD) の該当する欄を 鉛筆 で縦に 濃く マークし、最後の質問に対する回答と共に同封の封筒に入れて 8月末日 までにご返送下さい。

なお、この質問紙は、いずれ皆様方の集計結果をご報告致しますときまでお手元に保存し、他の方々の回答と比較してご覧下さいますようお願い致します。

氏名(随意) : 「もしもご記名下さいます方は、カードの表側左端の枠の中へお書き下さい。」

I. カード表側上段 (カッコ内の数字は上下2段に分かれた回答欄の番号を示します。)

- |           |      |            |            |            |             |
|-----------|------|------------|------------|------------|-------------|
| 性         | 別    | (1) a. 男   | b. 女       |            |             |
| 現住所：国内    | (2)  | a. 北海道     | b. 東北      | c. 関東      | d. 中部       |
|           |      | e. 近畿      |            |            |             |
|           | (3)  | a. 中国      | b. 四国      | c. 九州      |             |
| 海外        | (4)  | a. アジア     | b. 太平洋     | c. 北米      | d. 欧州       |
|           |      | e. その他     |            |            |             |
| 現在の国籍     | (5)  | a. 日本      | b. ア. 太    | c. 北米      | d. 欧州       |
|           |      | e. その他     |            |            |             |
| 卒業：(CLA)期 | (6)  | a. 1-5     | b. 6-10    | c. 11-15   | d. 16-20    |
| ／(GS)年    | (7)  | a. 26-30   |            | c. G'59-61 | d. G'62-66  |
|           |      | e. G'67-71 |            |            |             |
|           | (8)  | a. G'72-76 | b. G'77-81 | c. G'82-86 |             |
| 在学中の専攻分野  | (9)  | a. H       | b. SS      | c. NS      | d. L        |
|           |      | e. E       |            |            |             |
|           | (10) | a. GSDE    | b. GSPA    | c. CSCC    | d. 研究生      |
|           |      | e. その他     |            |            |             |
| 最終学位      | (11) | a. B. A.   | b. M. A.   | c. Ph. D.  | d. Litt. D. |
|           |      | e. その他     |            |            |             |
| 教員免許      | (12) | a. なし      | b. 英語      | c. 社会      | d. 数学       |
|           |      | e. 宗教      |            |            |             |
| 在学中：住居    | (13) | a. 自宅      | b. 下宿      | c. 寮       |             |
| 課外活動      | (14) | a. なし      | b. 文化系     | c. 体育系     | d. 両方       |
| 家族：結婚     | (15) | a. 未婚      | b. 既婚      | c. 離婚      | d. 死別       |
| 子供        | (16) | a. なし      | b. 1-2人    | c. 3-4人    | d. 5人以上     |
| 宗教        | (17) | a. なし      | b. 仏教      | c. 基督教     | d. 神道       |
|           |      | e. その他     |            |            |             |
| 職業：就職経験   | (18) | a. なし      | b. 就職中     | c. 転職1回    | d. 2回       |
|           |      | e. 3回以上    |            |            |             |
| 現在の職種     | (19) | a. 専門      | b. 管理      | c. 事務      | d. 自営       |
|           |      | e. 主婦      |            |            |             |
|           | (20) | a. 教職      | b. 研究      | c. その他     |             |
| 企業機関の種類   | (21) | a. 貿易      | b. 生産      | c. 金融      | d. 運輸       |
|           |      | e. 報道出版    |            |            |             |
|           | (22) | a. 官庁      | b. 教育      | c. 医療      | d. 宗教       |
|           |      | e. 国際機関    |            |            |             |
| 企業主       | (23) | a. ア太系     | b. 北米系     | c. 欧州系     | d. その他      |
|           |      | e. 多国籍     |            |            |             |
| 地域での活動    | (24) | a. 職能別     | b. 政治      | c. 宗教      | d. 奉仕       |
|           |      | e. 市民運動    |            |            |             |
|           | (25) | a. PTA等    | b. 家庭塾     | c. パート     | d. スポーツ     |
|           |      | e. 趣味娯楽    |            |            |             |





#### Ⅳ. カード裏側下段

次頁の12箇条は本学が設立の認可を受ける際に掲げたICUの〔目的と使命〕です。

さて、創立以来30数年を経た今日、私たちはこれらの理念と目標が果たしてどこまで達成されたのか厳正に自己点検をなし、その上で今後ICUの進むべき方向を皆と共に探り、合意の得られる新たな目標を定めて、本学の将来の発展のために努力致したいと願っております。

そこで先ず全文をお読み頂き、その後から右肩の5段階尺度で皆様の評価を表わして下さい。

## 国際基督教大学設置要項

### 1. 目的及び使命

国際基督教大学は、基督教の精神に基づき、自由にして敬虔なる学風を樹立し、国際的教養と社会人としての良識とを有する指導的人材を養成することを目的とする。

本学は国際的協力を依り設置せらるるものであり、その名称の示す如く基督教精神、国際親善並びに民主主義を強調し、下記各項を強調重視する「明日の大学」たらんことを期す。

- |                                                                                               |                   |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|
| 1. 学問の自由を操守し、総合研究を奨励する。                                                                       | 76 a. b. c. d. e. |
| 2. 独立の思索能力と科学的批判力の涵養に努める。                                                                     | 77 a. b. c. d. e. |
| 3. 教育に精進し、たえず批判と評価を通してその進歩改善に努力する。                                                            | 78 a. b. c. d. e. |
| 4. 実社会との生きたる連繫を保ち、高遠なる真理が民主社会の原動力となることを謀る。                                                    | 79 a. b. c. d. e. |
| 5. 教授は本邦のみならず広く世界各国に亘ってこれを求め、すべて基督教徒にして学識人格共に卓越せる学者、教育家をもってこれに充てる。                            | 80 a. b. c. d. e. |
| 6. 学生は男女共学とし、人権、国籍、宗教の如何を問わず、本学建学の趣旨に共鳴して入学を希望する者の中より、その人物、志望、健康、思想、家庭、学力、指導者の素質等を考慮して厳選収容する。 | 81 a. b. c. d. e. |
| 7. 日英両語を学園用語として国際的学園生活を実践する。                                                                  | 82 a. b. c. d. e. |
| 8. 全寮主義を原則とし、教授と学生との民主的共同生活により人格の陶冶及び学問と生活との一致をはかる。                                           | 83 a. b. c. d. e. |
| 9. 学園内にコミュニティー・チャーチを設け、宗教生活の徹底をはかり、基督教的人生と世界的エトスの確立を期する。                                      | 84 a. b. c. d. e. |
| 10. 健康教育の徹底を期し、衣食住の合理化をはかる。                                                                   | 85 a. b. c. d. e. |
| 11. 学生の人格を尊重し、学習、生活、職業及び人間関係等に関し補導制度を整備し、適切なる個人的ガイダンスを与える。                                    | 86 a. b. c. d. e. |
| 12. 農園労働、学園美化、寄宿舎運営等とその他の労働と奉仕の体験を通し、労働尊重の精神と自治、自立の道を習得せしめる。                                  | 87 a. b. c. d. e. |

これら12の項目は、言葉の表現はともあれ、今後もICUの基本的な教育方針として意義ありとお認めでしょうか。右の5段階尺度でお示し下さい。

- |                      |                      |                       |
|----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. 88 a. b. c. d. e. | 5. 92 a. b. c. d. e. | 9. 96 a. b. c. d. e.  |
| 2. 89 a. b. c. d. e. | 6. 93 a. b. c. d. e. | 10. 97 a. b. c. d. e. |
| 3. 90 a. b. c. d. e. | 7. 94 a. b. c. d. e. | 11. 98 a. b. c. d. e. |
| 4. 91 a. b. c. d. e. | 8. 95 a. b. c. d. e. | 12. 99 a. b. c. d. e. |

- a. 堅持したい。  
b. 大切にしたい。  
c. あればよい。  
d. どうでもよい。  
e. 捨ててよい。

### V. (随意) : 「恐れ入りますが、お手持ちの書簡用紙をお使い下さい。」

最後に二つの事項について自由にご意見をお述べ下さい。一つは「ICU教育の長所と短所」、もう一つは「卒業生としてこれからのICUに望むこと」、以上の2点につき夫々便箋1枚以内に無記名で、ご感想をなるだけ率直に、要点を簡潔に箇条書きして下さいますようお願い致します。

御協力、本当に有難うございました。

**EVALUATION OF ICU EXPERIENCES  
BY UNIVERSITY CONSTITUENTS  
— 1986 Follow-up Study —  
(English Résumé)**

Kazuo Hara, Naoko Ohi,  
Saeko Kawado and Yoshiya Suzuki

A survey on the evaluation of university experiences was conducted by six groups of the university constituents, i.e. faculty members, part-time lecturers, members of the Board and trustees, general staff, alumni, and currently enrolled students. The number of subjects participated from these groups are shown in Table 1.

A questionnaire consisted of altogether 99 items was employed. First 25 questions in Part I were about the demographic data of individual subject, next 25 items in Part II asked the degrees of *usefulness*, whereas the following 25 items in Part III did for the *importance*, of their university experiences on both academic programs and other various campus activities. A half of the last 24 items in Part IV asked the degrees of *accomplishment*, while the latter half did for the *significance*, of pursuing 12 basic goals and missions stated in our university constitution.

Frequencies of responses to the demographic questions in Part I are summarized in Table 2. Mean scores obtained from all alumni on Parts II and III for the evaluation of academic programs and campus activities are shown in Fig. 1. Those results were further analyzed, by the year of graduation, in terms of the rank order of each item within a group. Thus, Figs. 2 and 3 indicate the alumni's attitudinal changes on university experiences over the past 35 years. Similar analyses were also conducted for other 5 groups, and their comparisons are made in Figs. 4 and 5.

Evaluations on the degrees of accomplishment in the past and significances of those goals and missions of the university were treated exactly in the same manner as stated above, i.e. Fig. 6 for all alumni, Figs. 7 and 8 for different graduating classes, and Figs. 9 and 10 for the comparisons among different constituents of the university community.